環境で地方を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

成果報告会　発表資料

活動団体名：特定非営利活動法人仕事人倶楽部

活動地域　：北岩手9市町村（久慈市、二戸市、葛巻町、普代村、軽米町、野田村、九戸村、洋野町、一戸町）

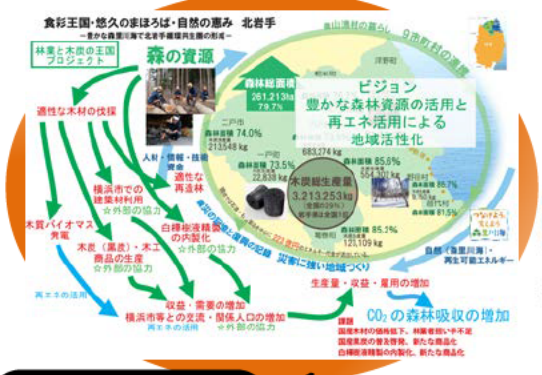
地域循環共生圏を活用して目指す地域の姿

北岩手循環共生圏（豊かな森里川海・人・情報・技術交流）

里の資源

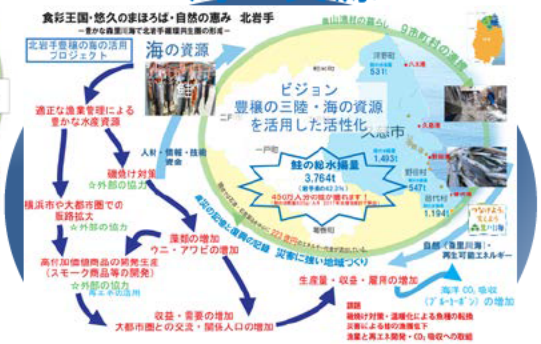
雑穀、山葡萄（ワイン）、畜産（チキン、福来豚、短角牛etc）、酪農、各種農産物、甘茶…等

森の資源



森林、木炭、木質バイオマス、白樺美林、キノコ、山菜、クルミ、漆・・・等

海の資源



サケ、ウニ、アワビ、ナマコ、ホヤ、昆布、のだ塩・・・等

太陽光、陸上・洋上風力、小水力、木質バイオマス、畜産バイオマス、地中熱・・・等

再生可能エネルギー資源

北岩手循環共生圏(各自治体の解決すべき課題・プロジェクトの種・取組

ビジョン:「北岩手ブランドの形成」

北岩手循環共生圏と横浜との広域連携

北岩手循環共生圏のステークホルダーを巻き込んだ体制

ビジョン

食彩王国・悠久のまほろば・自然の恵み　北岩手

ー豊かな森里川海で北岩手循環共生圏の形成ー

北岩手循環共生圏協議会（仮称）

令和２年３月に結成

・北岩手９市町村の強みを生かしつつ一つの循環共生圏としてまとまることで新たな経済圏や環境圏、文化圏等が形成され、全体のボトムアップが成される。

・北岩手９市町村が一つにまとまることで、北岩手に根ざした森里川海の多様で多様な地域資源を有することになる。

・ひと、もの、こと、かねの循環が太く大きく動き出す。

代表者：　遠藤譲一　久慈市長

事務局：　久慈市企業立地港湾課

活用する資源

北岩手の

食彩・自然

岩手県農業研究センター

岩手県工業技術センター

いわて産業振興センター

伊藤園

岩手大学

岩手県立大学

久慈市　二戸市　軽米町　一戸町　洋野町　葛巻町　九戸村　野田村　普代村

岩手県内の金融機関

やまぜデザイン会議

９市町村の道の駅

三陸鉄道

岩手県内のマスコミ

環境省

活動団体

特定非営利活動法人

仕事人倶楽部

専門家

NPO・NGO

バイヤー

金融・投資家

建築家

デザイナー

料理人

職人

ミュージシャン

スポーツマン

その他専門家

ステークホルダー

久慈地方森林組合　二戸地方森林組合　JA 新いわて

葛巻町森林組合　浄法寺森林組合　農業者

九戸村森林組合　林業者　畜産業者

久慈市水産業協同組合

久慈地域の水産業生産者

水産者

北いわてアパレル産業振興会　ワイナリー　浄法寺漆生産組合

ものづくり事業者

普代村鵜鳥神社　神楽団体　歴史文化施設

一戸町御所野遺跡　二戸市天台寺

岩手県商工会連合会　久慈市商工会議所

商工業者

北岩手循環共生圏ブランドの確立

調査研究専門部会

農業・林業専門部会

水産業専門部会

文化教育人材育成専門部会

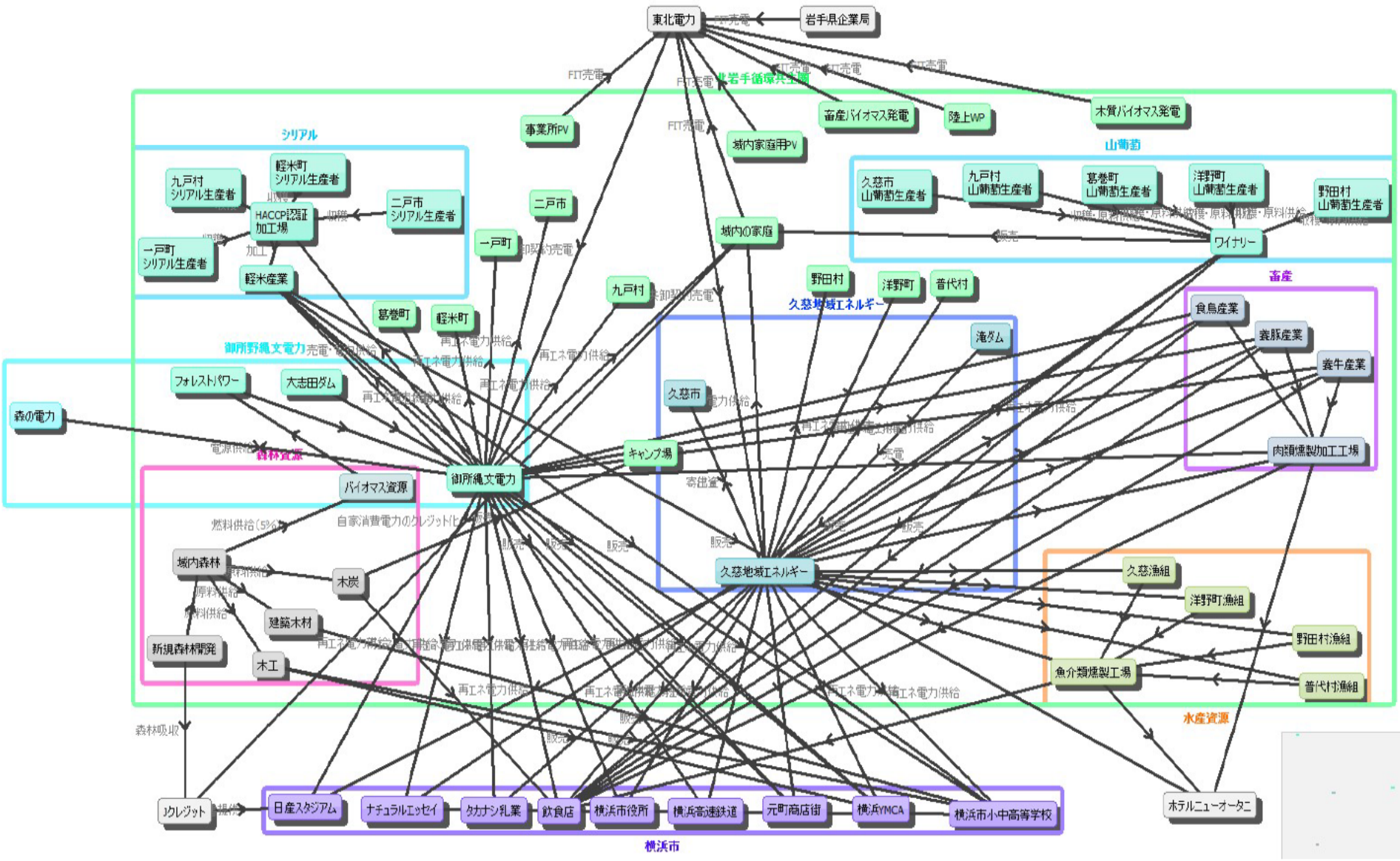
観光・環境整備専門部会

再生可能エネルギー専門部会

北岩手の９市町村が１つの循環共生圏 として市場を拡大し、

都市部（横浜市）との地域循環交流を推し進めることで新しい圏益を創成する。

北岩手循環共生圏のステークホルダーの相互の関係



地域のビジョンを実現するための成果指標

- 北岩手の9自治体が、「ＣＯ2排出量実質ゼロ」に向けた活動を地域を巻き込み、横浜市と連携して行う。
- 北岩手の地域資源を活用し「北岩手ブランド」構築を図る。（雑穀の活用、山ぶどうワイン活用等）
- 地域の畜産酪農生産者と山口県長門市の燻製専門店が協力し、畜産物を活用した燻製工場の建設を検討する。
- 日本一の白樺美林と活用した樹液商品のベースとなる、樹液精製施設を圏内に建設することを検討する。
- ブルーカーボン強化地帯として整備し、CO2固定と海産資源の増殖を図る事業を検討する。

	短期目標	長期目標
環境	域内の再エネ電力の普及を図り、前佐体の2%を確保する努力をする	域内の再エネ電力の普及を図り、前佐体の70%を目指して
	圏内自治体は、Zero Carbon KITAIWATEの構築を目指す	Zero Carbon KITAIWATEを宣言する自治体を13にまで増やす
経済	北岩手循環共生圏の取組に賛同し、新たに事業展開する「とんがり者の会主要メンバー数」30名	北岩手循環共生圏の取組に賛同し、新たに事業展開する「とんがり者の会」による事業収益得られるようにする
	北岩手循環共生圏の取組により、北岩手に特化したツアー造成を行った観光事業者数1カ所以上	北岩手循環共生圏の取組により、北岩手に特化したツアー造成を行った観光参加者数150人以上
社会	講演会・北岩手展等のイベントの開催4回以上	北岩手循環共生圏の圏域内での認知度80%以上
	北岩手循環共生圏に連携する自治体数9自治体	北岩手循環共生圏に関わる自治体の人口100,000人以上に留める

コアとなる事業の概要3つ（事業のタネ）

1	事業の名称	**北岩手雑穀のブランドプロジェクト**	
	事業の概要	岩手県の雑穀は以前から有名であり、花巻がその中心であった。しかし、最近では軽米町を中心に二戸地域の雑穀が非常に高品質でスーパーフード等のブームもあり席巻してきている。 雑穀そのものの生産は、完全有機で古来の生産技術をもって丁寧に生産されている。そのため高品位であるため、10年ほど前からホテルニューオータニと連携しながら、全国ブランドから世界的なブランドになまでになってきた。その様な状況から、大手食品メーカー等からの話も舞い込むようになったが、収穫後の原料製品の取扱いが、HACCP等の近代的な基準をクリアしていないため、ペンディングになっている。今盛り上がってきた、北岩手の雑穀を更に高めていくには、生産体制の見ないしを含めた事業検討が必要であると考えられ、北岩手循環共生圏の中で自治体の枠を超えて連携していくことになった。	想定される課題・ボトルネック 必要性の認識は各ステークホルダーの中に広がっているが、具体的な施設についての検討がまだ始まっていない。 設備設置場所、事業体制、資金調達、経営計画等についても今後検討する内容である。 横浜市とのエネルギーを主体とした広域の連携についても加味し、当該商品のみならず、再エネ利用、低炭素化、横浜市との連携も検討する必要がある。
2	事業の名称	**北岩手山ぶどう王国プロジェクト**	
	事業の概要	岩手県は山ぶどうの一大生産地である。北岩手はその大部分を占めており、山ぶどうの生産から圏内2カ所おワイナリーにて山ぶどうワインの醸造も行っている。しかし、一般のみならずワイン業界でも、山ぶどうワインの知名度は低く、大きい取引にはつながらず、出荷量が低迷している状況にある。高品位な山ぶどうワインが安定的に作られるようになってきていることから、ワイン愛好家やワイン取扱い業者に影響緑のある専門家を招聘し、「山ぶどうサミット」や「山ぶどうワイン会」等のイベントを開催し、山ぶどうワインの認知度と評価を得ることにより、ワインの生産性を高め、ひいては山ぶどうそのものの生産性を高める活動にしていきたい。そのことにより、雇用の増加や生業としての担い手不足解消につなげられるようにしていきたい。	想定される課題・ボトルネック イベントの開催や人的な協力が必要なため、資金が必要である。 如何に効率的に、効果的なPRが出来るかの検討が必要である。 ターゲットの選定や効果の測定についての検討が必要である。 商品の販売のみならず、横浜との連携を考えたり、横浜市への再エネ融通との連携を加味した検討が必要である。
3	事業の名称	**日本一の白樺美林プロジェクト**	
	事業の概要	全体面積の約80%が森林の北岩手循環共生圏では、森林の地域資源の活用が不可欠なものとなっている。その中でも、日本一の白樺美林（約31万本）は、景観観光資源としてだけでなく、日本では希少な白樺樹液を産出する。白樺樹液は、雪解け間際の一時期しか採取できない。その白樺樹液を原料にした製品を地域資源開発商品として開発し販売している。 しかし、白樺樹液は採取後、直ぐに加工しないと白樺樹液商品の原料としては使えない。そのため、現在では莫大な輸送費を掛け北海道美深町まで樹液を送り、精製し送り返してもらうという非効率な作業を行っている。圏域内で白樺樹液の精製施設を設けることで、コストカットと共に、利益率が向上する事により、樹液生産者の収益向上、生業創出による担い手不足解消に取り組みたい。	想定される課題・ボトルネック 資金調達の手法。 施設設置の候補地が未定。 施設運営に向けた法的な手続き等についても調査が必要 白樺樹液精製の技術指導が必要 再エネ利用や横浜市との連携を考えたマーケティングも検討していく必要がある。

今年度事業の成果と課題、今後の意気込み

今年度の成果
（本事業に取り組んで良かったこと）

- 地域の課題が明確に見えた事と、ステークホルダーを含め様々な事業展開や自治体連携の取組が出来たこと。
- 横浜市と連携する事により、再エネ供給、地域資源の活用等の大都市と地方との連携の1モデルとして構成出来た事。また、ブルーカーボン等の新しい取り組みにチャレンジ出来た事。
- 北岩手循環共生圏を9市町村で結成した取り組みが岩手圏内でも話題を呼んでおり、様々な展開が加速化していくのが感じられたこと。

地域の活動の上での課題

- 地域のビジョンについて
  どのように構成するか等の様々に迷いました。特に複数の自治体連携で北岩手循環共生圏を構成し、その連携体が更に横浜市と広域に連携する複雑な構成の中で、様々な地域資源を活用した曼荼羅を掻くのは、困難を極めた。
- ステークホルダーの巻き込みについて
  ステークホルダーの方々を平日の昼間に集めるのには、非常に時間と労力と費用が掛かった。
- 成果指標について
  大本に何が大切なのかの捉え方で指標の考え方が変わるので、その調整に苦慮した。

今後の意気込み

- 北岩手循環共生圏も、今やっと何をなってるんだろう？と注目を浴び始めた段階であり、これからも地域住民の方々や事業者、横浜市の方々への啓発や認知度向上に向けての取組が必要である。これからも地道に北岩手循環共生圏を浸透させ、2030年や2050年には北岩手の住民や横浜市の関係するところが、北岩手循環共生圏の取組を先駆的な取組として行ってきたことを誇りに思えるようにしたい。
- 発表では、3つの大きな事業展開を示したが、実際には7事業について、ステークホルダー（とんがり者の会）では検討しており、この7事業については、同時に検討していきます。
- 北岩手循環共生圏の幹事自治体に久慈市、副幹事自治体には軽米町になって頂き、自治体としてゼロカーボンへの取組や横浜市との連携についての連絡会は継続しえ実施していきます。